

Persuasion における「死」について

井上麻美

序

ジェイン・オースティン (Jane Austen 1775-1817) は、プロットの中に様々な小さな出来事を挿入することによって登場人物たちの反応を示し、その人物たちの人間性を的確に描いているが、その一つとして、登場人物たちの死や病いを組み入れている。例えば『分別と多感』(Sense and Sensibility 1813) のマリアン・ダッシュウッド (Marianne Dashwood) は風邪をこじらせて肺炎にかかり生死をさ迷った後、それまでの分別に欠ける自分の行いの愚かさを思い知り、身を正す。また、『マンズフィールド・パーク』(Mansfield Park 1814) のトム・バートラム (Tom Bertram) は、遊び好きで浪費癖のある放蕩息子であったが、命に係わるほどの病いにかかった後に改心する。

一方で、死を免れない人物たちも登場する。例えば『マンズフィールド・パーク』のドクター・グラント (Dr. Grant) は食べるのが大好きな教区牧師であり、その食生活が原因で脳卒中により若くして死んでしまう。さらに『説得』(Persuasion 1818) のリチャード・マズグローヴ (Richard Musgrove) は、生前も死後も何の関心の対象にもならなかった人物で、家族から疎まれ、海軍に送られたがそこで死を迎える。

そこで本論では、リチャードの死を軸にして、その他の人物の死や病いと比較しながら彼らと周りの人々の態度や行動を見ていき、彼の死をオースティンがどのように描いているかを考察していきたい。

1

まずはリチャード・マズグローヴと家族との関係を見ていきたい。リチャードは、アップパークロス (Uppercross) のマズグローヴ夫妻の息子であり、チャールズ (Charles) の弟、ヘンリエッタ (Henrietta)、ルイーザ (Louisa) の兄にあたる。彼は海軍の少尉候補生として海上に出ていたが、物語が始まる2年前に死

亡している。つまり物語の最初からいない存在なので彼について語られることも少ない。家族にとってリチャードは厄介者として認識されており海上に送られた。彼からは滅多に音信がなかったことも手伝って、家族からは常に忘れられた存在で、死亡の知らせにも悲しむ者はいなかった。

The real circumstances of this pathetic piece of family history were, that the Musgroves had had the ill fortune of a very troublesome, hopeless son; and the good fortune to lose him before he reached his twentieth year; that he had been sent to sea, because he was stupid and unmanageable on shore; that he had been very little cared for at any time by his family, though quite as much as he deserved; seldom heard of, and scarcely at all regretted, when the intelligence of his death abroad had worked its way to Uppercross, two years before. (P 34)

彼は頭が悪く、思いやりがなく、役立たず (thick-headed, unfeeling, unprofitable 34) で、生きていようが死んでいようが価値がない存在 (nothing 34) であった。

しかしながら、このように誰にも顧みられなかった存在のリチャードが、突然、母マズグローヴ夫人の悲しみの対象となる。このことは、クロフト夫人 (Mrs. Croft) の弟ウェントワース大佐 (Captain Wentworth) がアップパークロスを訪問すると聞いたとき、その名前は乗船している艦の艦長で世話になっているとリチャードの手紙に書いてあったことを思い出し、それがきっかけで夫人は悲しみにくれているということがルイーザによって語られる。

このときルイーザは何度も “Poor Richard!” と繰り返して言うが、彼が死んだとき誰も悲しまなかったという事実からみて、それはむしろ機械的に口に出しているだけで心から悲しんでいるわけではない。そして、マズグローヴ夫人は生前だけでなく死んでからも誰にも顧みられなかった息子のことを「大げさなため息」(large fat sighing 46) をつきつつ、息子はウェン

トワース大佐の下でしっかり者になって、まめに手紙を書くようになったのに大佐の元を去ったのは残念だと彼に嘆いてみせる。

“Poor dear fellow!” continued Mrs. Musgrove; “he was grown so steady, and such an excellent correspondent, while he was under your care! Ah! it would have been a happy thing, if he had never left you. I assure you, Captain Wentworth, we are very sorry he ever left you.” (45)

リチャードが送ってきた手紙も長い海上生活のうちまともなのは2通だけであり、それもウェントワース大佐が指示したものであった。そして、その他に送って寄越した手紙はすべてお金の無心をする内容であった。ロジャー・セールス (Roger Sales) は、この夫人について次のように述べている。“She wants to believe that her ‘stupid and unmanageable’ son might have been a future Nelson if he had not been cut off in his prime.” (Sales 186) ウェントワース大佐の名前を聞いて息子のことを思い出した夫人は、「嘆き悲しむ英雄の母を演じている」“she play the grieving mother of one of the nation’s heroes” (Sales 186) のであって、夫人の悲しみは表面上にすぎないのである。

では他の人物が死に至りそうになったときの周囲の人物たちの反応はどうなのであろうか。ここでリチャードの妹ルーザの事故について触れておきたい。彼女はライム (Lyme) に行った際、突堤 (cobb) の階段から飛び降りるのに失敗して頭を打ち、死ぬことこそなかったが重態に陥る。その場に居合わせたチャールズ、メアリー、ヘンリエッタ、ウェントワース大佐、ベニック大佐 (Captain Benwick) はルーザが死んでしまったと思ひ込みパニックに陥いるが、アンの冷静な対処により事態は収拾を見せ、ハーヴィル夫妻 (Mr. and Mrs. Harvill) の家で看病されることとなる。医者からルーザが絶望的な状態ではないと知らされた時の皆の反応は、思わず神に感謝する熱烈な感嘆の二、三の言葉を発し、それから安堵感と無言の喜びでいっぱいになる。

That he (=surgeon) did not regard it as a desperate case — that he did not say a few hours must end it — was at first felt, beyond the hope of most; and the ecstasy of such a reprieve, the rejoicing, deep and silent, after a few fervent ejaculations of gratitude to Heaven had been offered, may be conceived. (76)

そしてその後、アッパークロスのマズグローブ夫妻

に事故を知らせに誰が戻るかを議論した時、チャールズは妹を残して帰れないと言って妻メアリーと共にライムに留まり、ウェントワース大佐とアンとヘンリエッタがアッパークロスへ帰った。マズグローブ夫妻は取り乱すことなく事態を受け止め、ウェントワース大佐はライムへとすぐに引き返し、ルーザのそばにしていた。そしてルーザが心配でならないマズグローブ夫妻とヘンリエッタは彼女が回復するまでライムにいることを決めアッパークロスを発った。

リチャードの場合と違って、ルーザが突堤から落ちてから周囲のみんなの一連の動きには、彼女の無事を一心に祈って一致団結している様子が窺える。

2

次にリチャードと上官であるウェントワース大佐との関係を見ていく。ウェントワース大佐はラコニア号の艦長をしていたとき、具合が悪くなって前の艦長から推薦状を貰ったリチャードを半年間引き受けていた。Janet Tod と Antje Blank によれば、艦長は引き取った見習士官を作文や数学、天文学の教育を施し、監督するという義務がり、見習士官は最低6年間奉仕した後、大尉の資格を得るための試験を受けることが出来たと言うことである。(354) そしてリチャードも海上で上記のような教育を艦長から受けていたと思われる。大佐はマズグローブ夫人からリチャードのことを言われて、最初はわからなかったようであったが、次第に思い出し一瞬ではあるがある表情が浮かぶ。彼の輝く目がちらっと動いて、形のよい口元が歪む。その様子はアン (Anne) の視点から以下のように語られている。

There was a momentary expression in Captain Wentworth’s face at this speech, a certain glance of his bright eye, and curl of his handsome mouth, which convinced Anne, that instead of sharing in Mrs. Musgrove’s kind wishes, as to her son, he had probably been at some pains to get rid of him; but it was too transient an indulgence of self-amusement to be detected by any who understood him less than herself; . . . (45)

見習士官というものは一つの艦に落ち着くことはあまりないが、ウェントワース大佐がリチャードに対してマズグローブ夫人のように優しい気持ちを持っていたのではなく、大佐がリチャードのことを「厄介払いすることに苦勞した」らしいということウェントワ

ース大佐のことをよく知っているアンは確信するのである。アンはかつては大佐と婚約までしていた仲であり、アンと大佐ほど心を打ち明けあい、主もが合い、気持ちが一一致し、顔が気に入った二人はなかったであろうという仲であった。(there could have been no two hearts so open, no tastes so similar, no feelings so in unison, no countenances so beloved. 42) だからアンだけが、大佐が見せた一瞬の表情に気付いたのである。

ゆったりと満ち足りた風の大柄な人で、生まれつき優しい心や哀れな情緒よりも元気や上機嫌を表現する方が向いているマズグローブ夫人 (Mrs. Musgrove was of a comfortable substantial size, infinitely more fitted by nature to express good cheer and good humour, than tenderness and sentiment; 45-46) の嘆きを同じソファに座って聞くことによって、大佐は立派な上官としての自分の体裁を保ち、同時に義務を果たす。そのときの話し方は、わざとらしくなく嫌味もなく、同情心に溢れたもので、夫人の親心に対してとても親切な思い遣りを示すもの (a low voice, about her son, doing it with so much sympathy and natural grace, as shewed the kindest consideration for all that was real and unabsurd in the parent's feelings 45) であった。

軍人として海に出れば、命が危険に晒されているのはリチャードだけではない。ウェントワース大佐は老朽化の進んだアスプ号に乗っていたときのことを次のように話す。アスプ号は自分と共に海の底に消えるか自分に成功をもたらすかどちらか (either go to the bottom together, or that she (=dear old Asp) would be the making of me 44) で、結果として自分の望みを全て叶えてくれた。(She did all that I wanted. 44) その艦に乗っている間は天候に恵まれ敵の私掠船 (privateers 44) も大いに捕獲でき、さらには帰国の途中にフランスのフリゲート艦と出くわしプリマスに入港し、それから6時間もしないうちに4日4晩続いた強風に見舞われて、もし入港が一日遅れていたら自分は新聞の隅の小さな記事 (in a small paragraph at one corner of the newspapers 44) となっていたら自分には幸運だった (I had the good luck 44) と話す。

大佐のこの話を聞いていたルーザ、ヘンリエッタ姉妹とアンとは対照的な反応を示す。いまもなおウェントワースを愛し続けているがそれを表に出すことが出来ないアンは、彼が経験してきたことを聞いてひとりで密かに身震いするが、ルーザとヘンリエッタは本心を隠すことなく恐怖と憐みの混じった叫びを発する。(Anne's shudderings were to herself, alone : but the

Miss Musgroves could be as open as they were sincere, in exclamations of pity and horror. 44) そしてこの後にマズグローブ夫人が大佐にリチャードのことについて話し始めるのである。

死んだ息子を想って嘆くマズグローブ夫人とその夫人に対応する大佐と彼が海で経験してきた危険な過去を知って身震いし動揺するアンの三人は、夫人を挟んで同じソファに座っている。アンの細い身体や物思わしげな顔 (the agitations of Anne's slender form, and pensive face 46) は、大柄な夫人によって大佐から隠れている状態である。細身のアンと大柄なマズグローブ夫人が同じソファに座ってそれぞれに悲しみと動揺を抱えているという構図をオースティンは作り、二人の体格の差と悲しみの大きさとを比較する。マズグローブ夫人は大げさな間の抜けたため息 (large fat sighings 46) を吐いてウェントワース大佐に嘆いてみせ、大佐に慰めてもらうことで癒されていく。一方、アンは大佐の過去の話聞いて心から動揺している。同じソファの上にいるがそれぞれの嘆きの深さには差があるように見える。

そして身体の大きさと精神的な悲しみが比例しないことは確かであり、大きな身体の間人も優美な手足を持つ人間と同じくらい深い苦悩に陥る権利はあるが、理屈ではどうにもならない、趣味の点では耐えられず、可笑しさに襲われるような不釣り合いなものがあるとオースティンは以下のように述べる。

Personal size and mental sorrow have certainly no necessary proportions. A large bulky figure has as good as a right to be in deep affliction, as the most graceful set of limbs in the world. But, fair or not fair, there are unbecoming conjunctions, which reason will patronize in vain, — which taste cannot tolerate, — which ridicule will seize. (46)

このように書くことでオースティンは、「息子を厄介者と思っていた母親」と「息子を失い悲しみに暮れる母親」、または「部下に手を焼き厄介払いをしたいと思っていた上官」と「克己心 (self-command 46) を持って部下の母親に接する上官」といった一瞬出している誰もが持ちうるであろう本音と建前という二面をアイロニカルに表現している。

オースティンは、誰かの死や病いを通して、その人物との関係や自身の振る舞いについて教訓として作中

で扱うこともあれば、アイロニカルに描くこともある。本論で取り上げたリチャード・マズグローブは端役なのも手伝って物語に登場する回数が少ない。しかし登場は少ないが彼の周りの人間との関係性はよく表されている。リチャードは最初から死者として登場するが、彼の周囲の人間からは疎まれていた存在だった。彼が死んだと言う知らせを受けても比較的冷静な反応を見せていた。これに対して同じ兄弟のルイーザが命を失うかもしれない状態に陥ったときには、家族も周りの人間もとても気にかけていた。悲しみにもいろいろな深さがあり、リチャードの死を通して、オースティンは死んだ本人と彼に関わる人間たちとの関係を皮肉に時には辛らつに、そして滑稽に描いている。

引証資料

- Austen, Jane. *Mansfield Park*. ed. Claudia L. Johnson. Princeton University, 1998.
- . *Persuasion*. ed. Patricia Meyer Spacks. W. W. Norton & Company New York London. 1995.
- Sales, Roger. *Jane Austen and Representations of Regency England*. Routledge. 1994.
- Todd, Janet and Blank, Antje. Notes to *The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen. Persuasion*. Cambridge University Press. 2006.

参考文献

- 大島一彦『ジェイン・オースティン「世界一平凡な大作家」の肖像』中公新書, 1997。
- 『説得』キネマ旬報, 2001年。
- 都留信夫『イギリス近代小説の誕生』ミネルヴァ書房, 1995。